

パンデミックに対してレジリエントな社会・技術基盤の構築  
2021 年度採択研究代表者

2022 年度  
年次報告書

武見 綾子

東京大学 先端科学技術研究センター  
准教授

感染症対応における国際・国内ガバナンス向上に関わる研究—情報共有における異分野間連携  
と医薬品開発投資戦略に着目して—

## 研究成果の概要

今年度は、新型コロナウイルスの脅威を受けてグローバルヘルスに関わる国際的枠組みの見直し/新たな構築が実際に進展した。特に、各国から具体的な提案が提出されている新たな法的枠組み(WHO CA+/いわゆる「パンデミック条約」)、国際保健規則(IHR: International Health Regulations)の改正や、G20 を中心とした Finance and Health Task Force、新たに設立されたファンドである Financial Intermediary Fund for Pandemic Prevention, Preparedness and Response などの動きが活発であり、背景にある政治的な意図や分析も含めて経緯と考察をまとめた。また、各国のサーベイランスや情報共有体制の強化に着目し、新たなグローバル、地域、同盟(友好)国間での連携行動についてまとめ、分析した。以上の結果、グローバルヘルスにおけるガバナンスアーキテクチャの傾向として、(1)地域的メカニズムや同盟国間でのイニシアチブを含む複層的な体制が構築される傾向 (2)課題認識における射程の広がりにより裏打ちされた、分野横断性を踏まえた対応が実施される傾向 (3)グローバルな体制の中でも各国の意図や制度目的を反映して体制の複雑化が進む傾向、があることを明確になったため、これらの複雑化し、また中核的な調整主体を持たない態様を緩和するための意識的な介入の重要性について論じた。また、当初問題意識として提示した情報収集を通じた分野横断性の高まりについて、米国を中心にセキュリティ分野におけるインテリジェンスと感染症関連の情報収集との関係性についてさらに注目が集まったところ、新型コロナウイルス後の対応も踏まえてこれを分析した。他分野との比較のため、分野横断的な情報収集の形態とその調整について宇宙分野やサイバーセキュリティ分野を含め情報を収集した。G7 広島サミットに向けて、ワクチンの迅速な製造の促進策やグローバルヘルスアーキテクチャ改善などを含めた具体的な提案に注目が集まるところ、各研究成果を政策提言に反映するよう努めた。

### 【代表的な原著論文情報】

- 1) 城山英明・具芳明・近藤尚己・坂元晴香・神代和明・詫摩佳代・武見綾子・橋爪真弘・松尾真紀子(2023)「2023 年 G7 に向けたグローバルヘルスに関する提言」. IFI Policy Recommendation No.17, March 2023.
- 2) 武見綾子 (2022)「グローバルヘルス・リーダーシップ」『実践グローバルヘルス ―現場における実践力向上をめざして―』日本国際保健医療学会編 2022 年 4 月 10 日